

フィリピン・カオハガン島の変遷 —観光客が消え、見えはじめた心の豊かさ—

小早川裕子
東洋大学

E-mail: kobayakawa@toyo.jp

要約：グローバル経済の勢いは、急速な経済的物的豊かさをもたらす一方で、地域に埋め込まれた文化や価値観を破壊する威力も備えている。十分豊かになった地域において、利益追求から平和で豊かな暮らしの優先へと人々が行動変容を起こすにはどのような要素が求められるのか。フィリピンの小さな島に押し寄せたグローバル経済が引き起こした、格差と文化破壊を回復へと方向転換させた島のコミュニティ開発から考察する。

キーワード：カオハガン島、連帯、グローバル経済、コミュニティ開発、カオハガン文化

1. はじめに

(1) 研究の背景

新型コロナウイルスの出現は人々を引き離し、不安の中に孤立させている。特効薬もなく、いつ収束するか予測もできないまま世界中で急速に広がる恐怖から、人々はいがみ合い、差別や偏見を露わに罵倒し、互いの信頼を失っているように見受けられる。国レベルでも、覇権を争うアメリカと中国は互いを非難している。歴史学者のユヴァル・ノア・ハラリ (Yuval Noah Harari) は、危機を乗り越えより良いアフターコロナを実現するには、各国が情報やデータを共有し問題を解決していく「国際的な連帯」の重要性を説いているⁱ。しかし、個人の力量で利益が追求され格差を生じる市場経済では、連帯を図り平和と安全を編み出すシステム形成がいかに困難であるかを今日の状況が示しているⁱⁱ。人々が貪欲さを抑え個人の利益追及から連帯へと行動変容するには何を要するのだろうか。経済歴史学者のロバート・スキデルスキー (Robert Skidelsky) と息子である政治哲学者のエドワード・スキデルスキー (Edward Skidelsky) は、「経済成長の追求から幸福の追求に乗り換える」には「幸福になる理由を持つこと」であるとし、「七つの基本的価値」をあげている (スキデルスキー 2014)ⁱⁱⁱ。

本稿で取り上げる事例は、新型コロナウイルスが拡散する以前から連帯の必要性を悟り行動したフィリピンのカオハガン島である。島を訪れる観光客から得た富は、経済的物質的豊かさを島にもたらしたが、その一方で、島民は観光客相手に互いに競い合い、妬みを募らせ互いの信頼を失っていった。カオハガン島の変遷を通して、島の連帯が形成された背景と、新型コロナウイルスの影響で観光客が消えた現在、島に見られる新たな事象を考察し、地域に連帯をもたらせる要素を検討する。

(2) 調査地域

本研究の調査地域であるカオハガン島は、フィリピンのセブ島沖 10 キロ離れたオランゴ環礁に位置し、その面積は約 5 万平方メートルと、ほぼ東京ドームの大きさである。現在、およそ 700 人がこの島で生活している。縁があり日本人の崎山克彦が 1987 年にカオ

ハガン島を購入した。フィリピンでは、外国人が土地を所有する事は認められない。そのため崎山は、フィリピン人のパートナーと一緒に島の所有会社、フィリピン法人「Caohagan Inc.」を立ち上げた（パートナー60%所有、S氏40%所有）。1991年に移住して以来、崎山はカオハガン島の発展に携わっている。また、崎山は1992年に島を管理する目的で、「Caohagan Island Club Inc. (CICI)」を設立している。

（3）調査方法

主な調査方法は、定性調査、参与観察、資料収集による。定性調査は3回行った（2019年3月、8月、2020年3月）。カオハガン島の現状を中心に、島社会と島民関係の変容に関する聞き取り調査を崎山、セブ市とカオハガン島に住む各CICIメンバー、そして、カオハガン島の村長を対象に実施した。資料収集は、崎山が執筆したカオハガン島に関する書籍の他、カオハガン島に関する論文やウェブサイトから行った。

2. カオハガン島の変遷

（1）自然のままのカオハガン島（1990年代）

崎山がカオハガン島に移り住んだ29年前は、およそ350人が自給自足の生活を送っていた。島民は手付かずの自然がもたらす全ての恵みに感謝し、その恵みを分かち合いながら温和に生きていた。大人は子供達を分け隔てなく育て、子供達は大人と一緒に舟や漁の仕掛けを作り、家も建てた。子供達が15歳になる頃には、島での生活に必要な全ての知識や技術を身に付けた。島民にとって働くという事は生活の営みそのものであり、稼ぐための仕事ではない。自然のサイクルで生活する彼らは日の出と共に起床し、日差しが暑くなる前に必要な作業を済ませた。日中は木陰で集まりおしゃべりをするか、昼寝をし、夕方になるとラム酒やトゥバ（ココナッツ酒）を飲みながら麻雀などを外で楽しみ、暗くなると床に着いた。一日中働かない事もよくある。手に入らない物は週に一回周辺の大きな島で物々交換をした。冷蔵庫がなく食糧の保存ができないため、その日に必要な量だけ魚を獲り、消化しきれない分は近所にお裾分けした。カオハガンには互いを信頼し恵みを共有する「自然と共にある暮らし」＝「カオハガン文化」が価値観として根付いていた。

（2）島の所有者の登場とコミュニティ開発（1991年—2015年）

カオハガン島の島民は公的な居住認可を得ていない。普通、外国人が島を買うと島民は追い出されるが、崎山は島民の豊かなカオハガン文化に共感し、共に生きる事を選択した。崎山が目指す島の暮らしの根幹には、カオハガンの自然環境と島民の生活環境を保ち、それを一層良いものにしていくという思いがある^{iv}。

2010年に崎山が行った調査によると、漁などから得る島民1世帯（7～8人家族）あたりの月収は9,000円だった。これを世界貧困指標に照らし合わせると、島民は最貧困層に匹敵する。だが島民の暮らしは幸せで豊かだった。それはカオハガン文化があるからだと言及する。それでも時の経過と共に、島にも様々な情報がもたらされ、島民にも欲しいモノが出てきた。島民の暮らしに合わせた現金収入の取得方法を考えた崎山が最初に手掛けたのは、宿泊施設の建設とキルト作りであった。その間、水やトイレなどのインフラを整え、教育、ヘルスセンター、珊瑚保護区の創設などに着手し、不足していた基本的ニーズを補充していった。

島民は宿泊施設での業務やキルト作りなどから現金収入を得るようになり、高等教育を

受ける者も増え、インフラ整備で衛生的に暮らせるようになった。病気になった時も保険で病院に行けるようになり、不安はなくなった。崎山によるコミュニティ開発は、自然環境と生活環境を改善しつつ、カオハガン文化を維持することにある。それを実現するために崎山が開発プロセスで最も重視しているのは村長との意思の疎通である。村長と話し合いを重ね、島の諸課題に取り組んできた。島民は崎山のこれまでの貢献に深く感謝し尊敬している。このように平和で幸せなカオハガン島にもグローバル経済の波が押し寄せ、カオハガン文化維持の危機が到来した。

(3) グローバル経済の参入とカオハガン文化の危機 (2015-2019年)

アイランドホッピングはフィリピンを訪れる観光客に人気がある。セブ島がリゾートアイランドとして知られるようになると、アイランドホッピングでカオハガンに日帰りややって来る観光客が増えた。日帰り観光客から得られる収益は、2010年頃まではそれなりに充実していたが、カオハガンが提供するロブスター、シャコ、蟹、アワビと言った高級魚介類が人気を得て、2015年から大量の中国人観光客が押し寄せるようになった。毎日やって来る250-300人もの桁外れな数の観光客がもたらした島への影響は多大だ。魚介類の販売で時には一人一日9,000ペソ(約20,000円)になる事も珍しくない(CICIメンバー)。セブ市で大卒の平均的な初任給は、月12,000ペソ(約25,000円)である。島民が観光業を通してどれだけ富を得ているか想像できよう。資本主義原理で島民はより一層利益を得ようとして競い合い、喧騒的で見苦しい客引きの光景が目立つようになっていった。

グローバル経済の参入で島民は分かち合いたくないモノを持つようになった。すると、開放的で鍵をする事のなかった民家の周りに塀が囲んでいった。カオハガン文化の崩壊の始まりである。周辺の島々から魚介類を売りに来るようになると、島民は漁に出なくなった。教育を受けた若者は、都市部に働きに行くもののフォーマルな職につくには技術や能力が不十分で、結局はスラムに居住しインフォーマル労働者として働くことになる。定職に着けたとしても毎日決められた時間帯を「稼ぐために働く」都市生活に馴染めずカオハガンに戻って来るが、彼らには仕事がない。それでも「教育を受けた」彼らは、漁は無学の者がする汚い仕事として、漁には手を出さない。世代間の信頼や尊敬も次第に薄れていった。泡銭による生活が続き、島民のこれまでの価値観が変わっていく中で経済格差の拡大は島民間に嫉妬や妬みといった感情を生み、人間関係に亀裂が生じるようになっていった。

(4) 島民の選択 (2019-2020年)

カオハガン島を運営しているのが島の所有者である崎山だが、島民の意見を聞き束ねるのは村長である。島の平和と安全を維持するには両者が政策に合意する事が不可欠だ。観光客の客引きで唾み合いが多発する状況の改善策として、崎山と村長は協同組合による利益均等分配を島民に提案した。村長によると、およそ70名のメンバーの所得は15日間働いて、約15,000ペソ(約30,000円)である。時として1日9,000ペソも稼ぐ者がいる中、15日間の収益が15,000ペソとなれば大幅な減収である。不利益をもたらす協同組合の結成をなぜ島民は合意したのか。村長の説明によると、島民を説得するマジックはなく、島の幸せを願うのであれば、観光客を巡る争いは幸せな状態と言えるのかを島民に何度も問い、そこから導き出されたのが個人経営から協同組合による利益均等分配という事だった。

3. カオハガンの連帯

(1) 連帯への行動変容の鍵

協同組合が結成され1ヶ月経った2019年8月のマーケットでは、島民は相変わらず大勢の観光客の対応で多忙にもかかわらず、これまでとは異なり、客引きで島民同士が争う姿は全くなかった。島民への聞き取り調査は残念ながら次回を待たなくてはならないが、協同組合への連帯は話し合いで合意がなされた。島民との話し合いの場で村長が問うたのは、みんなの幸せのあり方だった。スキデルスキーの「幸福になる理由」の問いである。島民は長年体験してきた島に埋め込まれたカオハガン文化の存在こそが幸福をもたらすことを認識したのだ。「何もない島」にグローバル経済は経済的物的豊かさをもたらせた。しかし、その経済的物的豊かさが、彼らが体験してきた互いを信頼し、自然の恵みを分かち合って平和に暮らす豊かさを満たす事はなかった。

(2) 観光客が消え、見え始めた本質

中国・武漢のコロナウイルス拡散で2020年1月29日から中国人観光客がカオハガン島から消えた。3月1日から3日の3日間で行った第3回の調査では、泡銭で踊らされていた島には平和と静けさが戻り、時間の流れさえゆったりしているように感じた。大きな財源を失った島民の生活は不思議なほど穏やかだった。男達は若者を連れ立って漁に戻っていった。捕った魚を島民間で分かち合うようになった。カオハガン島にとって「幸福になる理由」とはカオハガン文化の維持であった。カオハガンの豊かな暮らしの文化は、島に自然との調和の中に安定をもたらし、島民間の信頼、尊敬、友情を深め、余暇の大切なおしゃべり時間も楽しいものにする。シンプルな暮らしは心身共に健康な社会を形成する。カオハガン文化こそが島民の自信であり自己確立へと促すのだ。

カオハガン島は新型コロナウイルスの拡散以前に経済成長の追求から幸福の追求へと行動変容した。将来、カオハガン島の魅力に引きつけられて多くの観光客が戻っていくだろう。その時、「幸福になる理由」を再認識したカオハガン島は、経済成長と幸福の追求のバランスの取れた暮らしを送る最先端のコミュニティ開発を世界に指し示す事が期待される。

【注記】

ⁱ 『コロナ危機、ハリリ氏の視座「敵は心の中の悪魔」』、朝日新聞デジタル、2020年4月15日、digital.asashi.com

ⁱⁱ 例えば、デヴィット・ハーベ、2017、『資本主義の終焉—資本の17の矛盾とグローバル経済の未来』、作品社；水野和夫・榎原英資、2015、『資本主義の終焉、その先の世界』、詩想社；マクス・ガブリエル他、2019、『資本主義の終わりか、人間の終焉か？未来への大分岐』、集英社

ⁱⁱⁱ スキデルスキーは『じゅうぶん豊かで、貧しい社会』(2014)で「七つの基本的価値」として、健康、安定、尊敬、人格または自己の確立、自然との調和、友情、余暇をあげている(pp. 208-257)。

^{iv} カオハガン島公式ウェブサイト、「崎山克彦のプロフィール」より (<https://caohagan.com/page-30/>)

^v 点在する島々を巡る日帰り観光。スノーケリング、島料理、お土産品などを楽しむ。

【参考文献】

恩田守雄、2006、『開発社会学：理論と実践』、ミネルヴァ書房

崎山克彦、1995、『何もなくて豊かな島』、新潮文庫；2001、『世界でいちばん住みたい島』、PHPエディターズグループ；2002、『ゆっくり生きる』、新潮社；2004、『カオハガンからの贈りもの』、海竜社

佐藤寛、2003、『参加型開発の再検討』、アジア経済研究所；2004、『援助と住民組織化』、アジア経済研究所；2005、『援助とエンパワメント』、アジア経済研究所；2007、『テキスト社会開発』、日本評論社

杉浦祐子、2013、『学び合う観光：フィリピン・カオハガン島が投げかける「豊かさ」への問い』、京都大学農学部食糧・環境経済学科、農学原論分野専攻、卒業論文

中西徹・小玉徹・新津晃一編、2001、『アジアの大都市 [4] マニラ』、日本評論社

アマルティア・セン、2009、『グローバリゼーションと人間の安全保障』、日本経団連出版；2016、『不平等の経済学』、東洋経済新報社

アマルティア・セン、池本幸生、野上裕生、2018、『不平等の再検討—潜在能力と自由』、岩波書店

A.V.バナジー&E.デュフロ、2012、『貧乏人の経済学：もう一度貧困問題を根っこから考える』、みすず書房

ジョン・フリードマン、2002、『市民・政府・NGO：力の剥奪からエンパワメントへ』、新評論

ポール・スピッカー、2008、『貧困の概念—理解と応答のために』、生活書院

ロバート&エドワード・スキデルスキー、2014、『じゅうぶん豊かで、貧しい社会』、筑摩書房社